

〈高校生の部 最優秀賞〉

書く

福井県立若狭高等学校 竹内 唯紗

縁側の向こうは清々しく晴れ渡った空、凧いだが若狭湾が広がっている。もともとは旅館だったという書道教室に、墨の香りがふわりと漂った。静かな和室の奥に、これまた静かに座る先生がいた。私が挨拶すると、私に気付いた先生が笑いながら「久しぶりやなあ」と言った。

私は先生に十年以上書道を習い、つい先日師範に合格した。それはそれは嬉しそうに先生は笑っていた。私もまた嬉しかったのだが、高校生になって休日も徐々に忙しくなり、教室に行く回数は目に見えて減っていった。

ここ数年の目標であった師範に合格した今、試験の作品づくりをする必要もなく、じゃあ創作をやるうか、という話になった。今までは試験や展覧会に合わせて、先生が書いたお手本を臨書することがほとんどだった。先生の書は柔らかく美しく、ときに豪胆。私にとって欧陽詢よりも、王羲之よりも偉大に感じられた。

先生の書を前に、まだまだ未熟な自分が創作をすることなど、許されないような気がした。事実、いざ創作を始めてみれば、目の前に大きな壁が沢山あった。草行書はくずし方が決まっているし、旧字を使うこともできない。先生に間違いを正してもらいながら、全体のバランスを考え、大まかな構想を練った。

よし、書こう。

意気込んで半切を畳に広げ、普段より大きな太筆に墨を含ませた。墨を含んだ筆はとても重い。筆を紙に対して垂直に保つだけでも疲れる。文字のリズムに合わせて、からだ全体を動かしながら書いていく。ひとまず自分が納得するものが出来上がった。

「先生、一回見てください」
「おー、なかなかできとるやんか！ もうちょっとここ伸ばそか。空白にゆとりが出るように」

縁側の外の庭で、新緑の木々が潮風に揺れる。静かで、穏やかな休日の海辺。私はじわりと汗をかきながら、制作に勤しんだ。

書けば書くほど、完成に近づいているようで、遠のいているようで。

「ここ惜しいわ、もう一枚行こか」

「まだ時間あるか？ もう一枚書いてみ」

「近づいとる！ もう一枚」

「もう一枚」

半切に、垂れた汗が染みを作った。エアコンはかかっていたが、全く涼しいと思えなかった。他の教え子はもうほとんど居ない。周りにはボツになった作品が何枚も置かれていた。もう三時間経っている。

ふと縁側の外を眺めれば、ひたすらに静かな世界があった。蛙の声も、風に揺れる木々も、若狭湾の漣も、まだ青い稲穂も、全てが調和する日本の初夏だった。

そうだ。選んだ言葉は、「村静蛙聲幽」。

村静かにして蛙声幽かなり。

息を吸い込んで、肺に酸素を巡らせ、激しく脈打つ胸の内を鎮める。しかし勢いは殺さずに、繊細に、からだの重みで筆を導く……。

先生は満足気に笑って、私の肩を叩いた。

「できたな」

「できました」

先生には遠く及ばない。そのことは今も昔も、きつとこれからも変わらない。でも少しだけ、脈々と受け継がれてきた書の本質を覗いたような、そんな心地よい疲労を感じた。

次は何を書こうかと、心を躍らせながら帰路についた。相変わらず静かな世界が広がっていた。